「remains」― 残骸 ―

加藤源広

登場人物

男1　山下…穴を掘る男。真希の婚約者。
男2　田中…探偵。山下を探しに来た。
男3　川上…山下の同級生。ゲイバーのホステス
女1　真希…山下の婚約者。
女2　リサ…少女。一人で岬にやってきた。

プロローグ

海の見える岬
岬の突端には海を見下ろすように桜の木が立っている
桜の木の手前には頽れた洋館
建物はほとんど残っていない
入口に壊れかけたドア。入口からすぐに階段があり、半地下の部屋につながっている

男（山下）がスコップを手に穴を掘っている

傍らに少女（リサ）がいる。

リサ　なにをしてるの？

山下　……。

リサ　なにをしてるの？

山下　また来たのか。

リサ　なにをしてるの？

山下　穴を、

リサ　穴を？

山下　穴を、掘ってる。

リサ　……なぜ？

山下　いや、そうじゃないか、

リサ　なにがそうじゃないの？

山下　穴が掘りたいわけじゃないんだ。

リサ　なにが掘りたいの？

山下　？　何が掘りたい？

リサ　……（うなづく）

山下　……何を掘ってるのかな。

リサ　何を掘ってるの？

山下　何か掘りたいのかな。

リサ　何が出てくるの？

山下　？

リサ　何かが出てくるの？　掘って、

山下　何が出てくるんだろうな……

リサ　探し物？

山下　（首を振る）なんなのかな。

リサ　宝物？

山下　わかんないな。

リサ　人に知られたくないもの

山下　？

リサ　秘密にしたいものが埋まってるの？

山下　秘密？

リサ　（うなづく）

山下　秘密なんか……

リサ　埋めに来たの？

山下　え？

リサ　秘密を

山下　埋めに来た？

リサ　（うなづく）

山下　埋めに来たのか？

リサ　掘り起こしに来た？

山下　おれは……

リサ　私は、

山下　？

リサ　埋もれてしまいたい。

暗転

第1景

薄汚れたスーツ姿の男（山下）が、穴を掘っている

そこへ、ダークスーツのきちんとした身なりの男（田中）がレジ袋を手に入ってくる

田中　山下さん、進んでますか？

山下　……。（無言でスコップを動かす）

田中　どうですか、調子は？　なにか見つかりました？

山下　……。

田中　外、桜咲いてましたよ。

山下　……。

田中　春ですね。

山下　……。

田中　初めて会ったときは、まだ、雪が降ってたのに。

山下　……。

田中　そこの、外の桜。もう少ししたら、お花見できるんじゃないですかね？

山下　……。

田中　あそこだったら眺めもいいですし、お弁当とか持って。　楽しそうでしょ？

山下　……。

田中　ちょっと気分転換でもいいじゃないですか、日がな一日こんなところで穴を掘ってるんですから。

山下　……

田中　嫌いですか？　お花見。

山下　いや、べつに……

田中　ね、そして気分転換ついでに、ちょっと、向こうに戻ってみるとか……。

山下　……。

田中　……ですよね。そんな気分じゃない。

山下　すいません。

田中、手にしたレジ袋の中から缶コーヒーを出して山下に差し出す

田中　はい、差し入れ。

山下　……。

田中　どうぞ。

山下　どうも。

田中　あ、あと、これもよかったら（続けてレジ袋からアンパンを出す）

山下　すいません。

田中　いやぁ、こういうのも、ずいぶん手に入りやすくなりましたよ。少しずつですが流通もよくなってきてるんですよね。

山下　……。

田中　あ、遠慮なさらなくていいですよ。私と山下さんの仲じゃないですか。それに、これも仕事のうちですから。

山下　？

田中　ほら、連れ戻す前に、倒れられても困りますし、少しは進展しないと、戻る気にもなってくれないでしょ。それに、こうやって信頼関係作っておけば、いざというときは薬仕込んで、眠らせて連れて行けますから。

山下　！？

田中　大丈夫ですよ。まだ、そんなことしてませんから、安心して食べてくださいよ。

山下　大変なんですよね。

田中　？

山下　そういう仕事も。

田中　そうですね。地味な仕事ですし。依頼内容にもよりますけどね、調査して、写真撮って、報告して……　それで終わりじゃないですから、たいてい。

山下　そうなんですか。

田中　そうですね。

山下　なんとなく、華やかなイメージがあるんですけどね。

田中　人里離れた洋館で、連続殺人の犯人捜し、とか、密室殺人のトリック暴いてると思ってました？

山下　まあ。

田中　謎はすべて解けた！　とか、じっちゃんの名に懸けて！　とか？

山下　なんとなく。

田中　そんなのはドラマとかマンガの中だけの話です。

山下　やっぱり？

田中　ほとんどの仕事が浮気調査とか、家出人探し、ペット探しとか、そんなもんです。あとは結婚前の素行調査とか？　ペット探しなんて、見つけただけじゃ、一銭にもなりませんからね。連れ戻してなんぼです。

山下　僕は逃げ出したペットですか？

田中　ま、さしずめ首輪をつけられる前に逃げ出した小柴、って感じですかね？

山下　小柴……。

田中　少なくともプードルじゃないでしょ。レトリバーとか

山下　まぁ。

田中　ダックスフントでもよさそうですけどね。

山下　ダックス……

田中　いや、そういうことじゃないですよ。

山下　そういうことって？

田中　とにかく、見つけた獲物は連れ帰らないと稼ぎにならないんですから。どうぞ遠慮なく召し上がってください。

山下　いただきます。

山下、缶コーヒーとアンパンを開封し口にする。

田中　腹、へってました？

山下　ちょっと。

田中　そりゃあよかった。

山下　ありがとうございます。

田中　どういたしまして。

山下　でも、こしあん。

田中　え？

山下　こしあん。

田中　？

山下　できれば粒あんのほうが好きなんです。

田中　は？

山下　パン。粒あんが。

田中　あぁ、

山下　できればメロンパンが一番好きです。
田中　気を付けます。次から
山下　すいません。
田中　いや、全然、気にしなくていいんですよ、最終的には、どうせクライアントに請求するんですし。
山下　え？
田中　だから、私の懐は痛まないんです。
山下　これ。
田中　必要経費ですから。
山下　？　返します。
田中　え？
山下　返しますから。
田中　いや、それ、いま返されても、半分食べてるし。
山下　……。（ポケットから小銭を探り）払います。
田中　いりませんよ、おごりです。これぐらいは私がおごります。
山下　でも、
田中　ほんとですから、気にしないで。
山下　……。
田中　そんなに向こうに借りを作るのはいやなんですか？　これ以上、迷惑をかけたくない？
山下　……。
田中　そんな、引け目を感じてるなら、いいかげん帰ってあげればいいじゃないですか。
山下　そんなんじゃありません。
田中　そんなんじゃありません、って言ってもね。もう、1ケ月でしょ？　いや、あと一

週間？　なのにこんなとこで……。

山下　……。

田中　山下さん、ちょっとは逃げ出された方の身にもなってみてくださいよ。

山下　逃げ出したわけじゃありません。

田中　だって、逃げたんじゃなきゃいったいなんなんですか？　何の連絡もなく結婚式の1ケ月前に家を飛び出して、仕事も辞めて……　失踪したと思うでしょ。結婚が嫌だったんじゃないかって……。しかも、あんな出来事があったのに、連絡もよこさず。私が見つけられたからよかったようなものの、そうでなかったら真希さん、今頃、瓦礫の街を彷徨ってますよ。

山下　すいません。

田中　わたしに謝られてもね、

山下　すいません。

田中　何度も言うようですけど、戻れないんですか？

山下　……。

田中　こんな大変な状況なのに？

山下　すいません。

田中　みんな、心配してますよ。

山下　わかっています。

田中　わかってるなら、戻ってあげれば、

山下　戻れないんです！

田中　……。

山下　このままじゃ、戻れないんです。

田中　真希さんのご両親はカンカンですよ、

山下　はい。

田中　でも、真希さんは待ってます。

山下　すいません。

田中　そして……、それ以上に、傷ついてます。

山下　はい。

田中　早く、帰ってあげたほうがいいと思いますよ。

山下　すいません。

田中　なにか手伝えることがあったら、言ってください。

山下　すいません。

田中　じゃ、今度はメロンパン、持ってきます。

山下　すいません。

田中　つぎはいい返事、期待してますよ。

田中、去る

山下　……

無言で、また穴を掘りはじめる。

暗転

第二景

穴を掘っている山下

傍らにはリサがいる

リサ　何か見つかった？

山下　……また来たのか。

リサ　何か見つかったの？

山下　見つけてない。と言うか、べつに何か探してるわけでもないし。掘り出したい何かがあるわけでもない。

リサ　じゃあ、なんで掘ってるの？

山下　お前には関係ないだろ。

リサ　井戸？

山下　こんな高台に井戸なんか掘ったって、なにも出てこないよ。

リサ　じゃあ、防空壕？

山下　防空壕？

リサ　シェルターみたいな。

山下　なんでそんなこと思いつくんだ。

リサ　ちょっと前に授業で聞いた。戦争の話。戦争のときはいろんなところに穴を掘ってたんだって。

山下　おまえ、学生だったのか。

リサ　だったよ。高校生。なんに見えてたの？

山下　……フリーター。いや、ニートかな、仕事、してなさそうだ。

リサ　それも当たり。

山下　もう、学校には行ってないのか？

リサ　学校は辞めた。

山下　なぜ。

リサ　なくなったから。

山下　なくなった？

リサ　なくなった。

山下　学校がか？

リサ　いろいろ。

山下　そりゃ……。

リサ　なぐさめてくれなくていいよ。べつに学校、好きじゃなかったし。

山下　友だちだっていただろ。

リサ　避難所でね、知らないおばあちゃんが言ってたんだよ、まるで戦争が来たみたいだって。

山下　戦争が来たか……、

リサ　でしょ。

山下　……だから防空壕なのか

リサ　うん

山下　たしかに、空襲に見舞われたみたいではあるな。本物の焼け野原は見たことないけど。

リサ　でしょ。

山下　だが、あいにく穴掘って逃げられるようなことはなにもないし。今のところ、どこかがミサイル落としてくる心配もしてない。

リサ　放射能とかは？

山下　屋根もない竪穴じゃ、雨も防げないだろ。

リサ　そうなんだ。でも、穴に入れば少しはましなんじゃないの？　だって、雨だって外の人より後で濡れるじゃない？

山下　は？

リサ　後で濡れるでしょ、低いところにいたら。

山下　……。

リサ　ほら、雨が降ってきて、ピューって来たら、高いところの人はこの辺で先に濡れちゃうけど、下の人は、ここ。このへんで濡れるじゃん。

山下　あぁ。

リサ　でしょ？　だから外にいるより、穴の中のほうが安全だと思う。

山下　あんまりかわんないだろ。

リサ　でも、ほら、時間が経つと減ってくんでしょ？　放射能。何日か経つと半分になるって。

山下　半減期か？

リサ　そう、それ！　だったら、ここより、ここのほうが少なくなるでしょ。

山下　あんまりかわんないだろ？　ここととここじゃぁ。

リサ　そのちょっとずつが大事かもしれないじゃん。

山下　嫌なのか、放射能。

リサ　嫌。

山下　専門家は大丈夫だって言ってるだろ。多少、浴びても。

リサ　そんなの関係ないの。私の知らないところで、気づかないうちに浴びてるっていうのが嫌。知らないうちに、ワーって浴びて、気づいたら、もうなんかが超えてますって言われるのは納得できない。

山下　だから超えないって言ってるんだろ？

リサ　浴びたか、浴びない、じゃないの。勝手に超えないとか決められるのが嫌なの。気持ち悪い。

山下　見えたらいいのか？

リサ　見えても、見えなくても、陰で勝手に決めないでほしい、むかつく。

山下　めんどくさいんだな。

リサ　めんどくさくない。普通。

山下　普通か、

リサ　普通だよ。

山下　で、普通の君は毎日、何しに来てるんだ。

リサ　何しにも来てない。ただ見に来てるだけ。

山下　なにを？

リサ　……海と町を。そしたらおじさんがいて、穴を掘ってた。

山下　いいのか、こんなとこに来てて。

リサ　関係ない。

山下　だれか心配しないのか。

リサ　どうでもいい、来たい気持ちは変わらないし。

山下　そんなもんかね。

リサ　おじさんだってそうでしょ？

山下　？

リサ　こんなときに、こんな場所で穴を掘ってるなんて、おかしいでしょ。

山下　そうだな。

リサ　言われて止められるなら、とっくにやめてる。やめられないから、ここにきてるの。でしょ？

山下　たしかに。

リサ　でも、このままでいい、とも思わない。いつか次に進まないと。
山下　そんなふうに、重く考えたことはないけどな。やめられるなら、やめてる……。そうだな、うん。やめろと言われても～♪　今では遅すぎた～♪
リサ　……。
山下　秀樹、感激！　……すいません。
リサ　だから大人はダメなんだよ。物事を軽く考えすぎる。真剣に考えないで、とりあえずでお茶を濁そうとする。だからそんな歌うたっちゃうし、気づいた時には、いつも手遅れになる。
山下　厳しいね。
リサ　厳しくない。普通。大人が鈍すぎるだけ。だから、そんなくだらないことで悩んでたのか？　とか言わないでほしい。
山下　え？
リサ　だって、大人はすぐに、そんなくだらないことで、って言うでしょ。そんな些細なことで、って。そういうのやめてほしい。悩んでる方は真剣なのに……。
山下　え？　あれ、今の話、そういう方向性？
リサ　なにが？
山下　真剣に考えないとか、手遅れになるとか……
リサ　なんか変なこと言った？
山下　ほら、いろんな事故の対応とか、計画の遅れとか、そういうことじゃ……
リサ　……おじさん、いま、私の悩みをバカにしてるでしょ？　そんなこと？　って思ったでしょ？
山下　いや、まあ……。
リサ　そういうところが、ダメだって言ってるの。もしかしたら、初めは些細な悩みでも、行き着くとこまでいったら、「死のう」って考えるかもしれないでしょ？　刃物振り回

して町で暴れだすかもしれないでしょ？　物事を単純化して簡単に考えることに慣れすぎて、真剣に考える習慣ができてないの、大人は。

山下　ごめんなさい。

リサ　だから原発だってあんな事故にまでなっちゃったんだよ。

山下　すいません。でも、そう、しょっちゅう真剣に考えてたら身が持たないだろ。心が。

リサ　そういうことは全部真剣に考えてから言って。やらないうちからあきらめるのはやめてほしい。

山下　そうだよね。だけどさ、

リサ　言い訳するのもやめてほしい。みっともないと思う。

山下　いや、そんなみっともないってさ……

リサ　いじけるものやめてほしい。かわいくない。

山下　あぁ、わかりましたよ。やればいいんでしょ、やれば……

リサ　なげやりにやるのも違うと思う。

山下　っていうか、無理だよ無理、なにもかも真剣になんてね。はじめっから無理！

リサ　開き直った。

山下　なんだよそれ、じゃあ、自分はできんのかよ！？

リサ　今度は、逆ギレ。

山下　だいたい、あれもやめて、これもやめてって、お前は俺のお母さんか！？

リサ　変な例えもやめてほしい。

山下　なんなんだよ！？

リサ　漠然とした質問もやめてほしい。

山下　やめろと言われても～♪　今では遅すぎた～♪

リサ　歌ってごまかすのもやめてほしい。

山下　ＮＯ！！！！

苦悶する山下

声　そこまでよ！

どこからともなく、というか外から声がする。

第三景

リサに追い込まれ苦悶する山下

男3（川上）が入ってくる

川上　それぐらいにしておいてあげなさい、お嬢ちゃん。

リサ　だれ？

川上　話は全部聞かせてもらったわ。

リサ　だから、だれ？

川上　（山下に）あなた、よく頑張ったわね。

山下　はぁ

リサ　知ってる人？

首を振る山下

川上　この勝負、私に預からせてもらいます！

リサ・山下　は？

川上　おめでとう！

リサ　え？

川上　あなたの勝ちよ。

リサ　え？　今、預かったばかりなのに、すぐ払い戻し？　って言うか、もともと勝負とかしてないし。

川上　（山下に）あなたもバカね。三十過ぎのおっさんが、いちばん口が達者な時期の十代の小娘に口先で勝負を挑んで勝てるわけないでしょ。

リサ　だから勝負とかしてないって。っていうか、だれ、おばさん……　っていうか、おじさん？

川上　おねえさん！

山下　あの……

リサ　だって、齢だし、女じゃないし……。

川上　おじさんでも、おばさんでも、この職業にいるものは、すべておねえさんなの。

山下　あの……

リサ　でも、

川上　お嬢ちゃん、いい？　オカマに齢とか性別は関係ないのよ。すべてを超越してオカマという存在なの。

山下　あの……

リサ　人間離れしてるってこと？

川上　常識に縛られない生き方をしてるってこと。

リサ　ルールが守れない人のいいわけですか？

川上　小娘ごときの理解を超えてるってことよ。

山下　あの……

川上・リサ　なに！？

リサ　だれ、この人？　知り合い？　友だち？　恋人？　愛人？　親戚？　すごく失礼なんだけど！

川上　だれ、この小娘！　知り合い？　友だち？　恋人？　愛人？親戚？　すごく失礼なんだけど！

山下　いや、あの、その……　（川上に）だれ？

リサ　え？

山下　だれ？

川上　いやぁ！！

川上の絶叫を残して暗転。

第四景

暗闇からチリンチリン、チリンチリンと鈴の音が響いてくる。

女（真希）が鳴らしている。左手で鈴を鳴らし、右手にはタンブラー、中には氷と酒が揺れている。酒は時の香りが染み込んだ琥珀、バーボン。

女は鈴をさみしそうに眺めている。

鈴が手から滑り落ちて微かな音をたてる。追いかけるようにガラスと氷がぶつかる。

酒をあおる。

真希　また夜がきた。きのうも来ていたし、きっとあしたも来てしまうのだろう。まったく世界というものは必ず夜更けずにはいられないようだ。暗闇がこわい、そう思うようになったのはいつからだろう。閉じ込められた押し入れは母さんの子宮、真夜中の公園は日の射さぬ海底、あの人の言葉は暗く深い井戸。触れなければ、覗かなければ一人で立っていられたのに……。人はアカルイとクライのどっちに生まれてくるのか。女はきっとアカルイだ。体内に暖かな暗闇を作るため、きっとアカルイのなかに生まれてくる。クライをなかに押し込んで、時々それを吐き出すんだ。やりきれない思いを詰め込んで痩せて、太って砂になる。さらさらとした砂漠の白い砂になる。砂漠の砂は白い夜明けを待っている。からだをまるめて頼りないあさひを待っている。そうすれば夜が大地に染み込んでいくのがわかるのだ。白い砂が、白い夜明けと交わって、地平線が溶けていくのが見えるのだ。また夜がくるのはわかっていても、砂漠の砂は

待っている。・・・・・もう悲しみを詰め込むのはいやだよ。

ゆっくりとグラスを口にもっていく。

ひとくち含んでグラスを指で弾く。

暗転

第五景

川上とリサの笑い声が聞こえる

川上とリサが楽しそうに歓談してる

隅のほうに山下

川上　そうなのよ、おかしいでしょう。

リサ　おっかしいですねぇ。マジですか・

川上　マジもマジ！　お尻に刺しこんだら、ピーっていうのよ。

リサ　鳥の格好してるのに？

川上　そうなのよ。ね？　あのときの格好なんだっけ？　カモ？　白鳥？　あれ？　カエルだっけ？

リサ　えー、カエルなんですか？

川上　トノサマガエル？

リサ　カエルはありえないでしょ。

山下　ヒドリガモ。

川上　なに？

山下　ヒドリガモ。

川上　あ、メロンパンどう？　アンパンもちゃんと粒あんでしょ？

山下　うん。

川上　わりと有名なお店なのよ、わざわざ並んで買ってきたんだから。

リサ　おいしいんですか？

川上　食べる？

リサ　ちょっと。

川上　で、何言ってたんだっけ？

山下　え？

川上　なんか言ってたよね、いま。

山下　あぁ、ヒドリガモ？

川上　は？

山下　ヒドリガモ

川上　ヒドリガモ？

リサ　なに、ヒドリガモって？

山下　鳥の名前だ、カモの一種。

川上　うわ、どうでもいい。

リサ　変なの。

川上　変なのよ。おかしいの。あんな「自分は人畜無害のフツウダフツオです」みたいな顔してるくせにね。

リサ　なんですかフツウダフツオって

川上　そんぐらい普通ってことよ。ねえ。

山下　なぁ

リサ　えー、フツウダフツオは普通じゃないですよ。

山下　なぁ。

川上　実際いたら変だけどね。なに？

リサ　それ言ったら、ヒコミさんも変な名前ですよね。

山下　なんで、メロンパンとアンパンなんだ？

リサ　ヒコミも変ですよ。

川上　え？

山下　メロンパンとアンパン。
川上　好きなんでしょ？
山下　なんで？
川上　なんか言った？
リサ　ヒコミさんも変な名前ですよね。
山下　だれに？
川上　そう？　卑弥呼みたいで気にいってるんだけど。
山下　だれに聞いたんだ？
リサ　なんですかヒミコって。
山下　だれに聞いたんだ？
川上　ヒミコはヒミコでしょう、知らないの？
リサ　歌手かなんかですか？
川上　田中さんよ
リサ・山下　田中さん？
リサ　田中さんがヒミコなんですか？
川上　ちがうわよ、田中さんはヒミコじゃないわよ。
山下　田中さんって、あの探偵のか？
川上　知ってるでしょ？
リサ　探偵なんですか？
川上　探偵じゃないわよ。
山下　探偵が、お前のとこに行ったのか？
川上　ヒミコは探偵じゃない。
リサ　え？
川上　来たの。

リサ　ヒミコが？
川上　来てない、ヒミコは来てないよ。
山下　なにしに？
リサ　ヒミコしに？
川上　頼まれたのよ。。
山下　なにを
川上　あんたに戻るようにって。
リサ　モデル？
川上　説得してくれって。
リサ　ヒミコって、モデルですか？
山下　説得って、
リサ　スカウト？
山下　なんで、お前が。
リサ　読者モデルですか？
川上　真希ちゃんに聞いたんでしょ。親友だって。
リサ　友人からの紹介？
山下　自分が来ればいいじゃないか。
リサ　よくあるパターンですよね。
川上　いいのよ。
リサ　友だちの紹介で、
山下　悪いな。
リサ　ほんとは自分もイケイケのくせにね。
川上　私も会いたかったし、久しぶりに。
リサ　で、ヒミコって読者モデルでいいんですか？

川上　リサちゃん、

リサ　はい？

川上　ヒミコって言ったら、邪馬台国の女王に決まってるでしょ？

リサ　え？

川上　ヒミコ。

リサ　はぁ。

川上　こんな服を着て、こんな髪をして、こんなことしてた、歴史上の人物よ。わかる？

リサ　え？　わかりますよ、あぁ、そっちのヒミコね。

川上　そっちかのって、どっちがそっちよ。リサちゃん、

リサ　はい？

川上　イイクニツクロウ？

リサ　鎌倉幕府！

川上　ナクヨボウサン？

リサ　鎌倉幕府？

川上　ナントオオキナ

リサ　カマクラバクフ……

川上　ヒトヨムナシイ

リサ　カマクラバク……

川上　リサちゃん、

リサ　はい。

川上　もしかして？　って思ったけど。

リサ　はい。

川上　あんた、もしかして本当におバカなの？

リサ　てへっ

川上　てへって、もう、可愛い！　ってゆるされるのは、今のうちだけだからね。
リサ　やめてくださいよ。それにしてもほんとなんですか？　あの人、結婚式の直前に逃げ出したって。
川上　そう、ほんと。
リサ　なんで？
川上　それがわかったら苦労しないわよ。
リサ　それで、こんなところで穴掘ってるんですか？
川上　おかしいでしょう。
リサ　おかしいですよ。
川上　だれにも何にも告げずに、なんの連絡もなしに、
リサ　なんですかそれ。
川上　しかも、勝手に仕事までやめて、
リサ　おかしすぎです。
川上　おまけに、地震が起きても電話一本、メールの1通もよこさないって言うんだから、おかしいにもほどがあるわよね。
リサ　いえ、それはおかしいっていうより、ひどいと思います。
川上　そう、ひどいでしょ。ひどいの。ひどいのよ。
リサ　おかしいんじゃないんですか。
川上　おかしくない。おかしくなんかないの。だって、ひどい男でしょ。婚約者は捨ててくるし、親友だった、わたしのことも忘れてるし。
リサ　おかしいですよね。
川上　おかしいのよ。
リサ　ひどいですよね。
川上　ひどい。

リサ　どっちなんですか？

川上　おかしくて、ひどい。って言うか、ひどくておかしいっていうか……　あえて言うなら、おかひどい？

リサ　なんですかそれ、

川上　ひどおかしい？

リサ　……

川上　おかひじき

リサ　意味わかりません。

川上　でさ、あんた、結局なんでこんなとこにいるの？

山下　……。

川上　なにしてるわけ？

山下　……。

川上　やっぱり、結婚、嫌だったの？

山下　いや、。

川上　マリッヂブルーってやつ？

山下　違う。

川上　違うの？

山下　そんなんじゃない。

川上　じゃあ、あれ？　自分で結婚指輪の石、掘りに来た？

リサ　あ、あの人がやってたやつ！　酔っぱらって、殴られた、歌舞伎の、はげの。

川上　海老蔵

リサ　そう、その人がやってたやつ！　テレビで見た。赤いの掘ってた！

川上　ルビー。

リサ　そう、よくわかんないけど。

川上　あんたさ、あれ、ヤラセだよ。

リサ　え、ヤラセなんですか？

川上　あたりまえでしょう。素人が一日二日で宝石とか掘れるわけないじゃん。あぁいうのは、専門の業者がガーってやって、何日もかけて掘り出すものよ。っていうかそもそも日本じゃ、ルビーとか掘れないし。

リサ　そうなんですか？　じゃ、ダメじゃないですか。

川上　ダメなのよ。どんなに掘ってもダメでしょう。海老蔵君だって、ブラジルまで行って、結局だめで現地で買ってきたんだから、あんたもあきらめて買ってけばいいのよ。

リサ　あれ、ブラジルでしたっけ？

川上　ベトナム？

リサ　いや、

川上　ミャンマー？

リサ　なんか南の人っぽい人が出てましたけど、黒っぽい……。

川上　とにかくさ、無理なことはやめて帰ってあげたら？　真希ちゃん、宝石上げて喜ぶような子じゃないじゃん。

山下　……。

川上　って、宝石探しも違う。

山下　……。

川上　もしかして、なんかやばいもの埋めに来た？

リサ　え？

川上　なんかやばいもの。

リサ　なんですか、なんかやばいものって？

川上　やばいものは、やばいものでしょう。ほら、あれとか、それとか、

リサ　あれとか、それって？

川上　だから、結婚する前に片づけておかなきゃいけないものでしょう。
リサ　結婚してから見つかったら困るものってことですね。
川上　そう。
リサ　ほかの女性の手紙とか？
川上　ほかの女の写真とか？
リサ　ほかの女性のプレゼントとか？
川上　下着とか
リサ　アクセサリーとか
川上　毛とか
リサ　爪とか
川上　そのものとか？
リサ　！　そのもの？
川上・リサ　まさか……。
山下　いや、おい、違うよ！
川上　あ、なんかその焦り方が怪しいわ。
リサ　ほんとはどこかに死体、隠してるんじゃないですかね。
山下　隠してないって。
川上　あ、あの箱の中が怪しいわ。
リサ　まさか、あそこに？
山下　ちがうって、
川上　あそこに収まるってことは、
リサ　まさか……
川上・リサ　バラバラ！？
山下　って、おい！　人が黙って聞いてれば、何言い出すんだ。

川上　だって、結婚の直前に、何も告げずに家を出て、人里離れた場所で穴を掘っている
って言ったら。
リサ　考えられることはひとつしかないですよね。
川上　邪魔になった愛人を始末する……。
リサ　はい。
山下　いや、いや、いや、いや、いや、違うから。
川上　やめて！
山下　え？
リサ　近寄らないで！
山下　いや、なんで？
川上　近寄らないで！
山下　違うって……。
川上　やめて！
山下　だから、違うって！
川上・リサ　なーんちゃって！
山下　え？
川上　あせった？
リサ　あせった？
山下　え？
川上　あせった？
リサ　あせった・
川上　冗談よ、冗談、ま、もし、ほんとに愛人、埋めようとしてたら、やばかったけどね。
リサ　気づかれてしまったからには、お前たちも！　みたいなね。
川上　あるある、よくあるわよね。

リサ　2時間ドラマの展開だよね。
川上　びっくりした？
リサ　びっくりした？
山下　……
川上　あと考えられる理由ってなにかしらね。
リサ　なんですかね？
川上　もしかして、男のほうが好きになったとか？
リサ　もしかして、若い子のほうが好きになったとか？
川上・リサ　だったら、言ってよねぇ！
山下　いやいやいやいや……
リサ　なんでスコップ持ってるんですか？
山下　ん？
川上　なんでスコップ持ってるのよ。
山下　いや、べつに？
リサ　だからスコップおいてくださいよ。
山下　なに？
川上　スコップ下ろして。
山下　なんで？
川上　いや、なんでって、
リサ　なんか危なそうだから、ねっ。
山下　だいじょうぶですよ。
リサ　だから、スコップ。
山下　何で逃げるんですか？
川上　いや、だから……

リサ　やめて……

ゆっくりと追いつめられる川上とリサ。

背中が舞台上の台にあたる。

ぐうぜん台の中身を見てしまうリサ

リサ　いや！

山下　見たね。

リサ　いやーっ！！

山下、残酷な笑み

暗転

第六景

真希がグラスを片手に座っている

田中が入ってくる。

田中　また、飲んでるんですか？

真希　飲んでないですよ。

田中　飲んでるじゃないですか。

真希　寝てないんです。

田中　眠れないんですか？

真希　寝られないんです。いつ、またあんなことになるかと思うと……

田中　いつからですか？

真希　いつからだろう？　もう、ずっと、あれからずっとです。もしかしたら、あの前からそうだったかもしれないけど。

田中　山下さんがいなくなってからですか？

真希　うーん、ちょっと、そうではないと思います。

田中　違いますか。

真希　違います。

田中　それよりも前？

真希　そうじゃなくて、彼がいなくなってからじゃなくて、戻ってこなくなってからだと思うんです。

真希、酒を一口飲む。

田中　そういう飲み方はよくないですよ。

真希　そういう飲み方？

田中　眠れなくて飲む、眠れないから飲む。お酒を薬みたいに使っちゃいけないんです。

真希　だって、アルコールは医薬品ですよ。

田中　お酒は嗜好品です。そういう飲み方は体に良くないんです。いちばんアディクトになりやすい飲み方と言われてます。

真希　アディクト？

田中　依存症です。アルコール依存症。いわゆるアル中です。

真希　アル中か……。

田中　お酒を薬代わりに使うぐらいなら、本当に薬で眠ったほうが体にはいいんですよ。

真希　眠りたいわけじゃないですから。

田中　え？

真希　眠りたいわけじゃないんです。酔いが回るとぼーっとするでしょ？　意識が膜につつまれてるみたいな。現実のいざこざや、わずらわしさがにじんでぼやけていくみたいな。繭の中に閉じこもってるみたいな、そういう感じが好きなんです。

田中　それも同じですよ。酒を布団代わりにくるまって、現実を避けてるだけでしょう。

真希　お酒が布団ですか。１００％日本酒風呂みたいな？　酔っぱらいそうだな。

田中　真希さん。

真希　はい？

田中　お酒は文化なんです

真希　え？

田中　文化は道具に使っちゃいけないんです。

真希　文化？

田中　はい。

真希　お酒が文化なんですか？

田中　はい。

真希　田中さん、面白いこと言いますね。探偵なのに。

田中　探偵の前は考古学者になりたいと思ってたんですよ。大学は考古学の専攻だったんです。

真希　考古学？

田中　そこの教授が言ってたんです。酒は文化だ、文明のあるところには必ず文明にふさわしい酒があり、酒があるところには、その酒にふさわしい文明がある。

真希　なんかただの酒好きのたわごとじゃないですか。

田中　そうなんですけどね。でも、人間の歴史と酒が密接に結びついてるのも事実です。

真希　なるほど。つまり、酒を飲まないやつは文化的に遅れてると？

田中　ちがいます。

真希　じゃあ、日本人なら日本酒をじゃんじゃん飲めと。

田中　違います。そういう文化を道具として使っちゃいけないんです。

真希　そうなの？

田中　そうなんです。

真希　よくわかんないなぁ。

田中　たとえば、中世から近世のヨーロッパはキリスト教という宗教を利用して十字

軍を派遣したり、植民地獲得の足掛かりにしました。

真希　宗教って文化？

田中　文化です。

真希　へぇ、でも、よくわかんないな、ほかには？

田中　産業革命は資本主義という思想を基盤にして、

真希　それもよくわかんない。

田中　じゃあ、最近のアメリカは民主主義という大義名分を

真希　あ、それもわかんないや。もっとわかりやすいのないの？

田中　じゃあ、学校給食は洋食文化を日本に押し付けるための、

真希　もう一声！

田中　槇原敬之は音楽を使って日本人を女々しくしたとか、

真希　おぉ、ほかには？

田中　好きなタイプは優しい男性！　という雑誌のアンケートが作り出したもてる男のイメージが、九州男児を絶滅に追い込んだとか。

真希　なんとなくわかった。

田中　わかりました？

真希　たとえば、不倫は文化だ、と言って自分の欲望を正当化したり。

田中　いや、

真希　たとえば、さみしさをごまかすために手近なところで恋人を作ったり。

田中　それはちょっと

真希　たとえば、心の隙間を埋めるために、食べものを詰め込んだり。

田中　真希さん。

真希　たとえば、ボランティアを笠に着て、被災地で「いいことしてやってる」的に自己満足に浸ったり？

田中　いや、ちょっと、

真希　そういうことでしょ？

田中　話題が全然、違う方向に行ってると思います。

真希　そう？　でも、本来の目的じゃない使い方でしょ？

田中　まあ。

真希　田中さん。

田中　はい？

真希　考古学って面白かったですか？

田中　えぇ、まあ。おもしろかったですね。

真希　化石とか掘ったりするんですよね？

田中　化石は掘りませんよ。考古学は化石じゃなくて、遺跡のほうです。

真希　瓦礫のほうですか、死体じゃなくて。

田中　死体って……

真希　だって、化石って元は死体ですよね。石になった昔の死体。

田中　死体ばかりじゃないですけどね。生物が存在した痕跡すべてが化石になります。

真希　生きてた証明ですか。

田中　まあ、考古学も、墓を掘り起こしたりもしますから。似たようなものですけどね。

真希　田中さんは、死体も、瓦礫も掘り起こしたんですね。

田中　嫌ないいかたしますね。

真希　そうですか？

田中　化石は生命の存在を証明し、遺跡は人の営みを証明します。

真希　見つけてもらえた化石は幸せですね。

田中　え？

真希　生きてた証がしてもらえます。

田中　そうとも言えます。

真希　全然違うけど似てるんだ。

田中　なにが？

真希　いま、向こうで起きてることと、田中さんのしてたこと。

田中　え？

真希　瓦礫を掘り起こして、証を、痕跡を探してる。

田中　似てますか？

真希　似てる気がします。

田中　……。

真希　田中さん。

田中　はい。

真希　なんで考古学、辞めちゃったんですか？

田中　師事していた教授が亡くなっちゃったんです。

真希　なんで？

田中　アル中ですよ。自分で文化を道具に使うな、とか言いながら、自分で向こう側に行っちゃいました。

真希　なんで？

田中　わかりませんよ。派閥とか学閥とか、研究費とか、あの世界も大変なんです。

真希　それでお酒に？

田中　自分が一番ダメだって、わかってたと思うんですけどね。

真希　わかっちゃいるけど、やめられない。

田中　そういうことです。

真希　仕事、楽しいですか？

田中　そうですね。探偵は考古学者に似ていると思います。

真希　どこが？

田中　他人の秘密を掘り起こして、飯のタネにするじゃないですか。大昔の人を扱えば考古学者で、いま生きてる人を扱えば探偵です。

真希　おかしな、探偵さんですね。

田中　そうでもないですよ。

真希　彼が消えた理由はわかりませんか？

田中　まだ、わかりません。

真希　あそこにいる理由は？

田中　見つかりません。

真希　じゃあ、ここにいない理由は。

田中　……

真希　つらいんです。

田中　え？

真希　つらいんです。私には証がないから。

田中　証ですか？？

真希　私と彼がつながってる証。

田中　指輪は？

真希　指輪に彼が戻ってくるんですか？

田中　……。

真希　戻ってこないんです。指輪にも、この部屋にも

田中　……

真希　つらいんですよ。もう、なにもないまま待ち続けるのが……。

田中　……

真希　夜中に、ちょっと揺れを感じて目を覚ますでしょ？

田中　……。

真希　怖い、と思って手を伸ばすと、彼のぬくもりがないんです。

田中　……。

真希　探しても、探しても、すがりつける彼の腕は見つかりません。

田中　さみしいですよね。

真希　いえ、悔しいんです。

田中　え？

真希　彼のぬくもりを覚えてる、この手が悔しいんです。

田中　……。

真希　なんで、覚えてるんだろう？　なんで忘れられないんだろう？

田中　……。

真希　そっと触れた感触が、彼の体温が、この掌に残ってるんです。

田中　……

真希　彼のぬくもりの欠片が私を苦しめるんです。

田中　……

真希　田中さん？

田中　？

真希　このぬくもりを忘れられる薬はあるんですか？

田中　……。

真希、一瞬グラスを掲げ、酒を飲み下す。

第七景

川上が穴を掘っている。

山下が入ってくる。

山下　なんだ、まだいたのか。

川上　いたら迷惑？

山下　別に迷惑じゃないけどさ。

川上　久しぶりに会ったんだし、少しぐらいゆっくりしていってもいいでしょ。

川上、山下にすり寄る

山下　いや、やっぱり迷惑だ。帰ってくれ！

川上　冗談よ。

山下　お前が言うと冗談に聞こえないんだよ。

川上　だったら、本気の方がよかった？

山下　なんでそうなる？

川上　未知の世界に飛び込んでみたら、新しい何かが見つかるかもよ。

山下　遠慮しておきます。

川上　うーん、いけず！

山下　やめろって！

川上　ちぇっ。

山下　あれ、彼女は？

川上　リサちゃん？
山下　あの、さっきまでいた。
川上　リサちゃんでしょ？
山下　そういう名前なのか？
川上　あんた、名前も知らないで話してたの、何日も？
山下　まあ、べつに知りたいとも思わなかったし。向こうも聞かなかったからな。
川上　あきれるわね。名前を伝え合うってコミュニケーションの基本でしょ。二人とも基本ができてないわ。
山下　わるかったな。で、彼女は？
川上　帰ったわよ。あなたが出てってからわりとすぐ。そろそろ帰ります、って。
山下　そうか。
川上　彼女、なに？
山下　知らないよ。4、5日前に突然やってきて、それからなにかわからないけど、毎日来てる。
川上　念のために聞くけど、まさか、彼女が原因だったりしないわよね？　ここへ来たの。
山下　は？
川上　家出した原因、彼女じゃないわよね。
山下　違うよ。なんでそうなるんだよ。
川上　付き合ったりしてるんじゃない？
山下　してない。
川上　肉体関係は？
山下　ない。
川上　まさか、生き別れの妹とか？

山下　ちがう
川上　生き別れの娘とか？
山下　なんで？
川上　生き別れのお母さんとか？
山下　なんでそうなるんだよ。
川上　ちがうの？
山下　ちがうよ。
川上　そう、ならいいんだけど。
山下　なんなんだよ。
川上　じゃあ、なんでここにきてるの？
山下　知らないよ。本人に聞けばいいじゃないか。
川上　そんなことできるわけないでしょ、いきなり、初対面なのに
山下　めちゃめちゃ仲がよさそうにしてたじゃん！　なーんちゃって！　とか息ぴったりで。
川上　あれぐらいは挨拶みたいなもんでしょ。
山下　あれが挨拶？
川上　10代のノリとオカマの適応力をもってすれば、1泊2日までは挨拶ね。
山下　挨拶で子作りまでしちまいそうだな。
川上　子どもはできないわよ、私、タマとってるもん。
山下　!?　そこまでやっちゃったのか？
川上　悪い？
山下　だって、そんなことしちゃったら……。
川上　それこそノリでね。って言うか勢い？　悩んでる時に、たまたまいい医者、紹介してもらっちゃってさ。勢いで。たまたま。タマだけに？

山下　勢いで取るようなもんじゃないだろ。
川上　勢いじゃなきゃとれないのよ。結婚とおんなじ、考えれば考えるほど踏み出せなくなるでしょ。
山下　結婚とキンタマは違うだろ？
川上　やらない言い訳なんていくらでも考え付くのよ。よし！　って思った時に思い切って飛び込まないと。
山下　だからってキンタマとるのは……
川上　だから、あんたが結婚するって聞いたときはびっくりしたわ。あんだけ優柔不断だったあんたがそんな決断ができるなんて。しかも相手は真希ちゃんだもの。
山下　いや、すまん。
川上　なんで謝るのよ。
山下　なんか隠してたみたいで。
川上　隠してたんでしょ。
山下　まあ、結果的に、なんとなく。
川上　いいのよ。それ知ってたら3人で会いにくくなるじゃない。気を使ってくれたんでしょ。あなたたちなりに。
山下　でも、なんか、ごめん。
川上　まあ、ちょっとは傷ついたけどね。親友の私に一言もないんだもの。いつもそばにいたのに。それじゃまるで、私だけオジャマ虫みたいで。
山下　そんな、オジャマ虫だなんて思ってないさ。
川上　そう言ってくれるのはありがたいけどさ、でも、やっぱりオジャマ虫でしょ？はたから見れば。
山下　オジャマ虫なんかじゃないよ。
川上　わたしだって、そう思いたいわよ、3人でいるのはほんとに楽しかったもの。で

も、その時に、わたしだけオジャマ虫だったのかな？　なんて思うとやっぱり悲しいじゃない？

山下　だから、オジャマ虫だなんて思ってないって。

川上　そう？

山下　あぁ。

川上　今、オジャマ虫って　使わないよね。

山下　昔も使わなかったと思うけどな……

川上　でも、よかったわ。

山下　え？

川上　二人が結婚してくれて。

山下　なんで？

川上　だって、真希ちゃん、ずっとあなたのこと好きだったじゃない。

山下　気づいてたんだ？

川上　高校1年の時からよ。あの子が部活に入ってきてから、わりとすぐ。あんたは気づいてなかったでしょ？

山下　あとから言われてびっくりした。

川上　鈍いもんね、あんたそういうところ。

山下　おれは、真希は、お前のことが好きなんだと思ってた。

川上　なんで？

山下　だって、お前のほうがモテただろ、あの頃。

川上　ま、背も高いし、成績もそこそこできたし、ルックスもよかったし？

山下　自分で言うか？

川上　おかげでオカマになるにはデカ過ぎて可愛げがなかったんだけどね。

山下　それに、真希はいつもお前のことを見てた。

川上　だったかしら？
山下　だからびっくりした。
川上　告白されて？
山下　自分でしたんだ。
川上　あんたがしたの？　告白？
山下　ダメもとでさ。お前が就職して、地方の学校に行った後、あいつがあんまり寂しそうにしてるもんだから、つい、言ってしまった。
川上　あんたも好きだったんだ……。
山下　まあ。
川上　あんたにそういう感情があるとは思わなかったわ。って言うか告白する勇気があったことに驚きよ。
山下　俺だって、人を好きになるぐらいするさ。真希もお前も、どっちも好きだった。
川上　ふーん、それって愛情？　それとも友情？
山下　どっちでもいいよ。でも、たぶん愛情だ。いつまでもお前たちと一緒にいたかった。
川上　うれしいこと言ってくれるわね。
山下　でも、あのときはもう、お前はいなかったから。
川上　私が近くにいたら、私と結婚してくれたのかしら？
山下　それは無理。
川上　よね。
山下　だから、まさかＯＫしてもらえるとは思わなかった。
川上　だったら戻ってあげなさいよ。
山下　もちろん、戻るさ。でも、今じゃない。
川上　そう言ってるうちに、取り返しのつかなくなることだってあるのよ。じっさい、

あなたがここでこうしてる間に、たくさんの取り返しのつかないことが起こったわ。

山下　わかってる。

川上　たぶん、これからだって、

山下　わかってる。

川上　大事なものだったら、そばにいてあげなさい。離れちゃうと、いろんなものが知らない間に変わっちゃうのよ。

山下　そうだな、教師だったはずのおまえが、そんなんなってたりな。

川上　そんなんってなによ。

山下　びっくりしたさ。

川上　そう？　メイク濃かったかな？

山下　なにがあったんだよ？

川上　いろいろあったのよ。なんて言いたいけど、要はこっちがほんとの私だったってこと。あんたが知らない間に、そのことに気付いたってだけの話。

山下　それで教師やめてオカマになったのか？

川上　ちょっと、違うかな。オカマになってから教師になったの。

山下　？

川上　オカマって生き方なのよ。もっと言えば性別。

山下　それは違うだろ。

川上　仕事じゃないってこと。だから、自分がそうだと気付いた時点で男はオカマに生まれ変わるの。なにも女装はじめた日がオカマ記念日ってわけじゃないわ。

山下　なんだよ、オカマ記念日って。

川上　僕が、はじめてスカートをはいたから、6月3日はオカマ記念日。

山下　で？

川上　キンタマを取ろうかなんて缶チューハイ、2本で決めてしまっていいの？

山下　サラダ記念日はもういい。

川上　だから、オカマだから教師ができないわけじゃないし、教師だからオカマになっちゃいけないわけじゃない。なんて思ってたわ。現に隠して教壇に立ってるオカマなんてごまんといるし。

山下　そうなのか？

川村　でも、私、子どもたちに嘘がつけなかったのよ。

山下　え？

川上　子どもたちに嘘をついたまま教壇に立っていられなかったの。だって、普段、子どもたちには、嘘はいけない、だましちゃいけない。って言ってるんだもん。

山下　まさか……。

川上　だから、子どもたちの前で、言っちゃったの。先生は今日から女になります。って

山下　大丈夫なのか、そんなことして？

川上　そしたらその日のうちに、親たちから電話が入って、校長からお呼びがかかって、教育委員会が来て、チョンよ。

山下　……。

川上　べつに続けられなかったわけじゃないんだけどね。ほかの学校に移って、何もなかったことにすれば、まだ教師でいられたわ。

山下　だったら、

川上　でも、せっかく自分に正直になってキンタマまで取ったのに、そこで嘘ついてたら、意味ないでしょ。ま、まだその時はキンタマ取ってなかったんだけどね。

山下　でも、やりたかった仕事だろ、教師は。

川上　生きたかった人生は女なの。それに私にとっては教師も仕事じゃないの。生き方よ。教育なんてどこにいたってできるの。

山下　そんなもんかな。
川上　そんなもんよ。だから、今は幸せ。
山下。そうか。
川上　だから、あんたも、せっかく正直に真希ちゃんに告白したんだから、その気持ち無駄にするんじゃないわよ。
山下　あぁ。
川上　幸せになんないと、承知しないんだから。
山下　わかってる。
川上　あんまり悲しませるんじゃないわよ。
山下　わかってる。
川上　これ以上泣かすようなら、私が取っちゃうからね。
山下　キンタマないくせに何言ってんだ。
川上　べつにオカマになったからって、男を捨てたわけじゃないんだから。
山下　なんだかわかんないな。
川上　気をつけなさい。
山下　……なぁ、真希に会ったのか？
川上　なんで？
山下　なんとなく。
川上　会ってないわよ。あの、田中って言う探偵がね、突然お店にやってきて、説得してほしいって言ってきたの。それだけ。
山下　そうか。
川上　それが、どうかした？
山下　いや、もう居場所もわかってるはずなのに、なんで、あいつ、自分で来ないのかな。って思って。

川上　なにそれ？
山下　ん？
川上　甘え？
山下　え？
川上　自分で飛び出しておいて、迎えに来てほしい、とか思ってんの？
山下　いや、
川上　あんた、ばっかじゃないの。真希ちゃんにだって、プライドはあるの。大事な約束すっぽかしていなくなって、自分を傷つけた相手のとこに、戻ってきてなんて、言いに来ると思う？　女々しいこと言ってないで、戻りたいなら、自分で頭を下げて戻ればいいじゃない。
山下　いや、そういうんじゃなんだ。
川上　だったら、なに？
山下　だから、なんか、体調とか崩してるんじゃないかと思って。
川上　あんたね、こんな状況で、何事もなく元気でぴんぴんしてるわけないでしょう。
山下　どれくらい悪いのかな？
川上　知らないわよ。気になるなら戻ったらいいでしょう。
山下　……そうなんだよな。
川上　……調子はずいぶんよくないみたいだよ。とくに（胸を示す）。
山下　そうか……。
川上　だから私のことまで、わざわざ探してきたんでしょ、あの探偵さん。
山下　……
川上　真希ちゃん、ああ見えて、意外に繊細なところあるんだからね。
山下　わかってる。
川上　早く戻ってあげなさい。

山下　あぁ。

川上　それから、リサちゃん。

山下　え？

川上　あの子、ここに来たとき、なんか言ってた？

山下　いや、べつに、海と街を見に来たって、言ってた。

川上　そう。

山下　あの子がどうかしたのか？

川上　気になるのよ。

山下　なにが？

川上　あのぐらいの子が一人でこんなとこに来て、瓦礫になった街と海を見に来るなんてさ、ちょっと気になるじゃない？

山下　そうか。

川上　それに、あの着てる服もちょっとね。

山下　服？

川上　袖口に泥がついてるでしょ。あれからもうけっこう経つのに……　洗濯とかできないのは仕方ないのよ。でも、まるで今、汚してきたみたいな泥。

山下　たしかに汚れてたかな。

川上　毎日、なにか探してるんだと思う。

山下　なにか？

川上　一日探して、見つからなくて、ここに上がってきて、この岬の上から街を眺める。

山下　なんのために？

川上　知らないわよ。知らないけど、でも、楽しくてしてるわけじゃないのはわかる。

山下　たしかに。

川上　あの子、死にに来たんじゃないかな？

山下　なんで？

川上　死にに来たけど、ここと決めた場所に、変なおっさんがいてできなかった。

山下　なんだよ、それ。

川上　なんとなく。オンナの勘よ。

山下　思いつきだろ。

川上　でも、気をつけててあげて。人生いたるところに青山あり、メメントモリ。古今東西言ってるわ。死なんていたるところで口あけて待ってるんだから。

山下　さすが、元教師。

川上　あんただってそんなことになったら嫌でしょ？

山下　わかった。覚えとく。

川上　それじゃ、帰るわ。そろそろ戻らないと、お店、間に合わないし。

山下　連れてかないのか？

川上　今日、連れてったら、もう二人きりじゃ、会えなくなるかもしれないじゃない？

山下　は？

川上　もう一日ぐらいは猶予をもらってもいいんじゃないかと思うのよ。

山下　なんだ、そりゃ。

川上　それじゃあ、また来るね。

山下　あぁ。

川上　なんかあったら、電話して。お店に来てもいいわよ。

山下　遠慮しとくよ。

川上　じゃ、

山下　あぁ。

川上　って気が利かない男ね、レディーは玄関先まで見送りなさいよ。

山下　なんだよ、それ

山下、川上、去る

第８景

真希が穴を覗き込んでいる。
傍らにリサがいる。

リサ　なにを見てるの？
真希　なに？
リサ　なにを見てるの？
真希　なに？
リサ　なにを見てるの？
真希　なにが見えるの？
リサ　暗い、暗い、空が見える。
真希　深い、深い、井戸が見える。
リサ　そこは井戸なの？
真希　昔ね。
リサ　昔？
真希　いまは埋められちゃったの。
リサ　だって、そんなとこを掘ったって、水なんか出ないって。
真希　ここは岬の上だからね、普通の井戸ぐらい掘ったって、なにも出てこないけど。
リサ　だったら。
真希　でも、ずっと、深く、深く、深く、掘れば水だって出てくるの。
リサ　そんな深い井戸、使いにくいじゃん。
真希　水を取るための井戸じゃないの。
リサ　え？

真希　水のための井戸じゃないの。
リサ　じゃあ、なんの井戸なの？
真希　星見の井戸。
リサ　え？
真希　星見の井戸。星を見るための井戸だったの。
リサ　なんか、ぜんぜん意味わかんないだけど。
真希　昔の人たちはね、星を見るために井戸を掘ったの。
リサ　それって占いかなんかの話？
真希　ちがう、本当に星を見るの。天文観測用の井戸なのよ。
リサ　昔の人たちってバカ？　星なんて夜に空を見れば見えるじゃない。
真希　そうじゃないの。この井戸は昼間の星を見られるの。
リサ　昼間の星？
真希　そう。
リサ　その井戸から？
真希　この井戸から。
リサ　……。
真希　わかった？
リサ　わかった！　それって穴の向こうに、地球の反対側の星が見えるってこと？
真希　残念。
リサ　ちがった？
真希　ぜんぜん違う。
リサ　ぜんぜんわかんない。
真希　星は昼間も輝いてるでしょ。でも、その弱い星の光は、大気の中の分子と衝突して乱反射した太陽の光に隠れて見えなくなってるの。だけど、反射した太陽の光が

届けない深い穴の奥、遠くはるか高い天空から降りてきたまっすぐな光しか届かない穴の向こうなら、昼間でも邪魔されないで星の光を見ることができる。だから深い深い井戸の底、波立たぬ水面には空を仰ぐだけでは見えない宇宙がみえるのよ。

それが星見の井戸。

リサ　そうなんだ。

真希　本当だと思う？

リサ　作り話なの？

真希　どうだろうね。

リサ　うそ？

真希　わかんない。たしかにそんな深い井戸の底に映った星の光が見えるのか？　とか。覗き込んだら頭の影で星が見えないんじゃないか？　とか、疑問はいっぱいだけどね。でも、日本中、世界中に星見の井戸はあるんだ。

リサ　ふーん。なにが見える？

真希　なにが見える？

リサ・真希　星が、星が見える。

暗転

第九景

山下、穴を掘っている

田中、入ってくる

田中　山下さん、すすんでますか？

山下　……。

田中　ほら、今日はメロンパン持ってきました。人気なんですよ、これ。わざわざ並んで買ってきました。

山下　田中さん。

田中　なんですか？

山下　川上のところに行ってきたんですか？

田中　あれ、川上さん、もう来たんですか？

山下　来ました、メロンパン持って……。

田中　じゃあ、これ、もう？

山下　食べました。

田中　早いなあ、昨日、教えたばかりなのに。

山下　なんで、あいつに教えたんですか。

田中　え？

山下　川上、なんで呼んだんですか？

田中　べつに呼んだわけじゃないんですけどね。一応、なにか心当たりはないか？　って思って、山下さんのやってることに。

山下　僕がわかんないのに、川上が知ってるわけないでしょ。

田中　人は思うほど、自分のことがわかってるわけじゃありませんから。

山下　じゃあ、何かわかったんですか？

田中　ぜんぜん。でも、二、三、思いつくことはありました。

山下　なんですか？

田中　山下さん、井戸、掘ってるんじゃないですか？

山下　違います。

田中　じゃあ、防空壕。

山下　違います。

田中　核シェルター。

山下　田中さん、この間の話、聞いてました？

田中　え？

山下　この間ここで話してたとき、来てたんじゃないですか？　どっか隠れるとこあるんですか？

田中　何のことですか？

山下　井戸とか、防空壕とか、

田中　え？　もう、だれか言い当ててました？

山下　当ててはいないですけどね。

田中　そうですか、じゃあ、井戸は違うわけですね。

山下　違います。

田中　それじゃあ、

山下　宝石、掘ってもいませんよ。

田中　え？

山下　違います。

田中　じゃあ

山下　愛人、埋めてもいませんからね。
田中　あなた、超能力者ですか！
山下　違いますよ。
田中　なんで、いちいち私が考えていることを……。
山下　たまたまです。たまたま、昨日同じことを言われたんです。
田中　デジャブですか？
山下　そういうのはデジャブって言わないでしょ。
田中　シンクロニシティ―？
山下　しいて言えば。
田中　わかりました。つまり、私が思いついたネタはすべて二番煎じだったと。
山下　ネタだったんですか？
田中　ですが次のネタには自信があります。
山下　ネタなんですか？
田中　私、考えたんですよ。掘りに来たのでもない、埋めに来たのでもない。
山下　はい。
田中　あと残るのは、
山下　残るのは？
田中　埋まりに来た！
山下　はい？
田中　埋まりに来たんですよ。埋まりに。地面をを掘って、穴を広げて、自分が入る。
山下　入ってどうするんですか？
田中　即身成仏です。
山下　ソクシンジョウブツ？
田中　即身成仏。

山下　なんですかそれ？

田中　ミイラですよ、ミイラ！

山下　ミイラ？

田中　知りませんか？　釈迦入滅の四十七億年後、この世に降り立ち末法の世を救うために現れるという弥勒菩薩。彼とともに世を救うため復活の夢を託して穴を掘る。望むのは救世済民か、現世楽土か？　穴を掘り終えた彼は手に小さな鈴を持ち、見守る人々に「この鈴の音が鳴りやんで三月すぎたら掘り起こし、私の亡骸を寺の小さな祠に納めてください」と言い残して冷たい穴の中に身を沈める。彼の目には、すでに紫雲たなびく極楽浄土が見えているのだろう、目には穏やかな笑顔が浮かび、口では朗々と真言を唱え始める。やがて穴は閉じられ、小さな鈴の音だけが響きわたる。

山下　……。

田中　どうですか？

山下　どうって？

田中　ミイラ、なってみる気だったんじゃないんですか？

山下　違いますよ。

田中　またまた、だって、掘るでもない、埋めるでもないって言ったら、埋まる。しかないでしょ。

山下　埋まりませんよ！

田中　なんで？

山下　ミイラにもなりません。だいたいなんでミイラになんかならなくちゃならないんですか？

田中　なんでって、世のため人のために決まってるでしょ？　釈迦入滅の４７億年後、末法の……

山下　そうじゃなくて、なんで私がミイラにならなきゃいけないんですか？
田中　いやなんですか？
山下　いやですよ。
田中　もしかして、お嫌いですか？　ミイラ。削って飲めば薬にもなるんですよ。
山下　やめてくださいよ。っていうか今まで、ミイラのこと好きとか嫌いとか考えたこともありません。
田中　え、そうなんですか？　それはもったいない。山下さん、ミイラはロマンですよ。再びの復活を信じて、生命の抜け殻を現世に残していく。あの落ち窪んだ眼窩、枯れ木のような手足。あの固く乾いた体は、軟弱な煩悩を吐き絞った、固い意志の塊です。
山下　言ってることがぜんぜんわかりません。
田中　いいですよ、ミイラ。わたし、こう見えて昔、ミイラかじってたんです。
山下　病気だったんですか？
田中　違います。勉強していたんです。
山下　勉強？
田中　はい
山下　ミイラについて？
田中　えぇ
山下　それはまた、おかしな勉強を……
田中　ちがいますよ。
山下　え？
田中　そういう、特殊なサブカル的なとか、オカルト的なということじゃなくて、考古学です。考古学。考古学をやっていたんです。
山下　考古学？

田中　はい。エジプトとか、メソポタミヤとか、遺跡とか、古墳の……。
山下　あぁ、考古学。
田中　はい。
山下　それでミイラね。
田中　えぇ。
山下　考古学やって、今は探偵？
田中　そうです。
山下　マンガ、読み過ぎなんじゃないですか？
田中　で、どうでしょ？　ミイラ？
山下　なりません。穴にも埋まりませんし、即身仏とか興味ありません。
田中　山下さん、日本のミイラ、即身仏というのはですね。復活信じ、固い意志でもって食事や水を断って、身体を未来に残したものです。未来で生きるために、生を断ち、死を拒絶した命の残骸。ミイラは矛盾の塊なんです。山下さん。
山下　？
田中　あなたは、もう一度、彼女の元に戻るためにここに来たとおっしゃった。彼女の元に戻るために、彼女の元を去ったあなたは、何を残そうというんですか？　悲しみの塊？　寂しさの結晶？
山下　なんの話ですか？
田中　真希さんが、病気を再発されました。
山下　え？
田中　しばらく過食嘔吐を繰り返した後、今は食事を一切口にしていません。
山下　どうして？
田中　真希さんは、何を信じて、何を残そうとしてるんでしょうね？

暗転

第十景

真希がゆっくり目を覚ます。

傍らに田中がいる。

田中　ある摂食障害者の報告。

真希　朝起きて米を炊く。買い物に行く、食パン1斤、菓子パン3個、お餅1袋、スパゲッティ1袋、焼きそば3人前、冷凍ピラフ2つ、卵1パック、オレンジジュース2リットル、ミートソース2缶。抱え切れないほどの食料を買って家に帰る。

田中　摂食障害、正確にはブリミア・ネルボーザ、アノレキシア・ネルボーザと言い、一般に過食症、拒食症として知られている。

真希　ご飯は一度に8合をノリの佃煮だけで黙々と食べる。食パンはジャムや蜂蜜をつけて1斤全部、菓子パンを3つ食べ、おもちは薄いだしで軟らかく煮る。スパゲッティは全部茹でて、たっぷりのバターとミートソースで和える。焼きそばには肉も野菜も入れない、ただ炒めてソースをかける。冷凍ピラフは電子レンジ。卵は焼くか茹でるか。オレンジジュースはパックのままでテーブルに置く。ほとんど半日かけて黙々と食べる。ただやみくもに食べ続ける。もう何も入らなくなるまで食べる。わたしの目には食べ物しか見えていない。食べること、ただ食べることだけがわたしを支配し、そのときわたしはそのためだけに存在している。

田中　文字どおり過食症は信じられないほどの食料を摂取する病であり。拒食症は食物を取ることを拒む病である。原因は無理なダイエットの反動、食べたい、痩せたい、絶対矛盾の願望の鬩ぎ合い、精神のアンバランス、そして不安。たいていの場合過食と拒食を交互に繰り返し、しだいに体を損なっていく。また、過食後

意識的に嘔吐を行うのもよく見られる症例である。

真希　食べるだけ食べるとトイレにいって吐く。食べたものすべてを、心に詰まった不安、悲しみすべてを吐き出す。涙でにじんだ視界の先、便器の暗闇をにらんで自分を呪ってみる。『バカヤロウ』、『バカヤロウ』、声と一緒にまた吐き出す。胃に詰まったものを全部吐き出すとまた食べ始める。また同じことを繰り返す。何度も何度も繰り返す。

田中　まだ彼は帰って来ないんですか。

真希、うなづく。

田中　もうやめたらどうですか。

真希、頭を振る。

田中　まだ待ってるんですか。

真希　……、

田中　続いていますか。過食嘔吐は、

真希、頭を振る。

田中　おさまったんですか。

真希　……、

田中　わたしにはわかっていた。過食症の患者は過食と拒食を繰り返す、今は拒食期に入ったのだ。……今度は食べてないんですか。

真希、うなづく。

真希　先生、中に虚ろがあるんです。ぽっかりと大きく口を開けた大きな虚ろ。暗い底知れぬ空洞があるんです。

田中　虚ろ。

真希　その虚ろは、かなしみの虚ろ。もってるだけで歯を食いしばってないと泣き出しそうになります。どんどん、どんどん、いろんなものを詰め込で、喉が苦しくなって、頭が痛くなって、それでも埋めようとしたけども、何を詰め込んでも、どんなに詰め込んでも、その虚ろは埋まってくれませんでした。

田中　あたりまえだよ。その虚ろは食べ物なんかじゃ埋まらない。体の虚ろじゃないんだから。

真希　先生、わたし気づいたんです。この虚ろを無くしちゃえばいいんじゃないかって。

田中　思考能力に障害が出ている。何日も食を断っているのだ出ても不思議ではない。どうやらそれがもとからあったパラノイア傾向に拍車をかけているようだ。え、

真希　この虚ろを中から追い出しちゃえばいいんです。きっと吐き出してしまえばすっきりするんです。この悲しみから解放されるんです。

田中　そんなことはできないんだよ。その虚ろは心の中にできた空洞なんだ。吐き出すことなんかできやしない。

真希　そんな、毎日一生懸命吐き出してるのに、

田中　なんだって、何も食べてないのに吐き出してたのか。

真希　何か食べたら、虚ろは吐き出せないよ。

田中　何日だ。何日続けている。

真希　ずっと、もう覚えてない。

田中　ばかな、そんなことしたら。

真希　いいの、ずっと待ってるんだから。ずっと待ってるの。ずっと、彼が戻って来たとき悲しむでしょう。自分を責めるでしょう。こんなわたしを見たら。それが楽しみなんだわたし。ねぇ、先生。

田中　……、

真希　先生。

田中　もういい、やめろ。

真希　どうしたの、先生。

田中　やめてくれ、おれは先生なんかじゃない。忘れたのか、俺だ、戻って来たんだよ。思い出してくれよ。

真希　先生。

田中　どうしたんだよ、戻って来たんだぞ。

田中、ここで初めて真希に触れる。

田中　彼女は泣いていた。落ち窪んだ眼窩、枯れ木のような手足、このすべてを吐き出したと思われる体から彼女は涙を流していた。何もかも吐き出したこの体は悲しみの塊だ。そこから流れる涙はどんな滴なのだろう。抱き締めようこの塊を、僕を待ち続け、あらゆるものを拒み続けたこの塊を。救いの手ではなく、慈愛の手ではなく。ただ愛しいという思いで動く手でこの塊を抱き締めよう。……メモが取れないよ。

暗転。

第十一景

真希が穴を掘っている

川上がやってくる。

川上　おはよう！　なんか出てきた？　差し入れ持ってきたわよ。

真希　！

川上　あら、あなた、どなた？　山下の知り合い？

真希　すいません、勝手に入っちゃって、

川上　いいのよ、勝手にもなにも、もともとだれの場所ってわけでもないんだから。何十年も前から空き家で、廃墟みたいなものでしょ。誰かの所有って言っても、いまさらじゃない？

真希　ですよね。

川上　ところであなた、どなた？

真希　あ、私、山下さんの、ちょっとした知り合いで。

川上　そう、（独り言）まさか、山下、真希ちゃんのほかに、こんな女が……

真希　あの……

川上　なに？

真希　あなたは？

川上　あ、私もなんていうか、山下の、ちょっとした知り合いで……

真希　あぁ。（独り言）まさか、山下くん、女じゃなくて、ほんとは男が好きだったの？

川上　どこに行ったのかしらね。せっかく差入れ持ってきてやったのに。

真希　あ、メロンパンですか？　ずっと好きだったですもんね。

川上　あら、そうだった？　昔はカレーパンが好きだったと思ってたわ。いつも食べてた。
　あと粒あんのアンパン？　あぁ、じじくさ。
真希　はい。でも、なにか好いことがあったときや、特別な仕事が終わったときは、いつ
　もメロンパンを食べてました。自分へのご褒美みたいに。
川上　ふーん、そう言われれば、そうだったかしらね。
真希　はい。
川上　言われてみれば確かに、あのときも……　っていうか、あなたなんでそんなとこま
　で知ってるの？
真希　あなたもなんでそんなことわかるんですか？
川上　ん？
真希　え？
川上　あれ？
真希　まさか？
川上　真希ちゃん？
真希　川上先輩？
川上・真希　えーっ！？
真希　どうしたんですか、その格好？
川上　あんたこそどうしたのよ、その体型？
真希　いや、あの、それは、いろいろありまして……。
川上　だって、あなた……　いや、その、あれ、
真希　拒食症ですか？
川上　そのそれよ、それにかかって、あれだって。
真希　探偵さんから聞いたんですか？
川上　聞いた。だから説得してくれって言われて。え？　あれ？　あ、もしかして拒食症

のキョって巨大の巨？　巨大に食べるってこと？

真希　ちがいます。拒否の拒、拒絶の拒です。

川上　そう、

真希　はい。これでもずいぶん痩せたんですよ。食べられなくて……

川上　そうなの？

真希　ガリガリです。

川上　ガリガリ……。

真希　ガリガリ。

川上　拒食症で太った人初めて見たわ。

真希　すいません。

川上　べつに謝んなくていいでしょ。

真希　すいません。

川上　いやぁ、それ、なにがあったの？

真希　え？

川上　だから、それ

真希　あぁ。初めはストレス太りというか、ストレス食いというか……　それからだんだん異常な食欲がコントロールできなくなってきて……。でもこのままじゃよくないって思って、今度は吐き出したらそれも癖になって、

川上　過食嘔吐ってやつね。

真希　はい。

川上　それで？

真希　わたし、なんか、燃費がいいのか、吐きが甘いのか、吐いても吐いても太るんですよ。吐いても吐いても、吐いても吐いても体重が増えるんです。まるで、食べ物じゃないべつの何かが体を重くしてるみたいで。

川上　それは、食べ物だと思う。
真希　そうなんですけどね。それで今度は、逆に食べ物を受け付けなくなって……。
川上　そう。
真希　はい。
川上　それって、でも最近の話なの？
真希　いえ、7年前くらい、大学卒業した次の年くらいに……　一旦は収まったんですけどね。結婚が近くなったら、また。
川上　太りはじめた？
真希　はい。
川上　まさか、山下が逃げた理由って、それだったんじゃないでしょうね？
真希　ちがいますよ！　……違うと思います。
川上　ほんと？
真希　だって、いちばん太ってた時期もつき合っててくれてましたから。
川上　でも、さすがに嫌になったのかもよ？
真希　やっぱりそうなんですかね！？
川上　なんて、違うと思うけどね。山下、そういうことで変わるやつじゃないし。優柔不断なくせに、こうと決めたら頑固だし。
真希　だといいんですけど。
川上　それで、今は食べれなくなったと
真希　はい……。あ、でも、拒食症っていうのは違うんですよ。拒食症って、ホントは標準体重を20％以上下回らないと、病気と認めてもらえませんから。
川上　でも、これ以上、同じことを続けていたら、確実にそういう事態になるわけでしょ？
真希　もしかしたら……。でも、わかりませんけどね。途中で食べたくなるかもしれないし。それに、少しぐらい、痩せたほうが都合いいじゃないですか？　もっとかわいい

ウェディングドレスも着れるかもしれないし。

川上　真希ちゃん、長引けば長引くほど病気って深く、治りにくくなっていくものよ。だいいちコントロールできないから病気なんだから。自由にやめたり始めたりできるなら病気じゃないでしょ。

真希　やめろと言われても　いまでは遅すぎた♪

川上　山下がよく歌ってたわね。

真希　下手だし、似てないし。

川上　それこそやめられなくなってるのかもね。

真希　川上先輩。

川上　前みたいに、川さんでいいわよ。なんだったらヒコミさんでもいいけどね。

真希　懐かしいですね、山下くんが、山さんで、川上先輩が川さん。

川上　刑事ドラマの真似事してたわね。「話は聞かせてもらったわよ！」なんてね。

真希　そのころは「わよ」なんて言ってなかったですけどね。

川上　そこですかさず山下が「おいおい、それは俺のセリフだろ！」って。

真希　全然、意味わかんなかったですけどね。

川上　そうよね、山さんはあなたが 10 歳の時に殉職してるんですもの。

真希　川さんは、いつからそんなことになったんですか？

川上　そんなことって、事故にでも合ったみたいな言い方はやめて。

真希　だって。

川上　いつから？　と言えばたぶんずっと昔から？　物心ついたときからそうだったんじゃないかしら？

真希　だって、昔は違うかったじゃないですか。普通の男の……。

川上　昔はね、気づいてなかったのよ。自分が男じゃないってことに。オカマはね、なるんじゃないの。気づくのよ。自分の中の女の子を発見するの。

真希　女の子なんですか？
川上　なにか問題ある？
真希　いや、べつに……。
川上　まだ社会に出てから、何年もたってないんだから。ベーベちゃんなのよ。
真希　ベーベちゃんって、30過ぎたおっさんが……。
川上　オンナでいるのは年齢じゃないでしょ。
真希　わたしもそんなふうに自信を持って言えたらいいんですけどね。
川上　オカマはね、気付いたオンナだから強いのよ。努力してないと女でいられないから。生まれながらにのほほんとオンナしてるアンタなんかには負けたりしないわ。
真希　べつにのほほんと生きてるわけじゃないですけどね。
川上　わかってるわよ。私が言いたいのはそういうことじゃないの。自分が何者かってことを自覚しなさい。そこが決まらないと、強さもしなやかさも生まれないんだから。
真希　強さ、ですか。
川上　そして、自分が何者でないかもね。あなたは私になれないし、私はあなたになれないんだから。
真希　やっぱり、すごいな、川さんは。
川上　なによ急に？
真希　わたし、高校の頃、ずっと川さん見てたんですよ。川さん、すごいなぁ、川さんみたいになりたいなぁ……って。
川上　あんた、山下が好きだったんじゃないの？
真希　好きでしたよ。だから、川さんみたいになりたかったんです。どうしたら川さんみたいに山下くんと仲良くなれるのか、一緒にいられるのか？　って、ずっと思ってました。
川上　あらやだ、それって嫉妬？

真希　そうかもしれないですね。あのころの二人は、ほんとうらやましかったですもん。
川上　そうかしらね。
真希　はい。
川上　でも、大丈夫。いまはもうあなたのものじゃない。
真希　どうなんですかね。
川上　自信持っていいのよ。あの優柔不断男に告白させたんでしょ？
真希　相当、じれったかったですけどね。
川上　想像できるわ。
真希　言ってくるか？　って思ってから、3年ぐらいかかったんじゃないですか？
川上　そういうやつよね。
真希　でしょ。
川上　でも、なんで自分で告白しなかったの？　いつだってできたでしょ？
真希　だって、私から言ったら、断りきれずに、OKしそうじゃないですか。
川上　なるほどね。
真希　そうなるのは嫌だったんです。
川上　めんどくさい男を好きになったもんね、お互い。
真希　え？
川上　やっぱり私は、あなたにはなれないわ。
真希　川上先輩……
川上　それにしてもどこに行ったのかしらね、山下。せっかく真希ちゃん、迎えに来てくれたのに。
真希　あ、違うんです。
川上　え？
真希　迎えに来たわけじゃないんです。ただ、どんなとこで、どんなことしてるのかと思

って……

川上　会いに来たんじゃないの？

真希　（首を振り）いないってわかってて来ました。田中さんに調べてもらって……。

川上　会えないのに、わざわざ出てきたの？

真希　はい。

川上　あんたもめんどくさい女ね。

真希　だって、負けた気分になるじゃないですか。出て行かれたのに、会いに来ちゃったら。

川上　絶対自分からは折れないってこと？

真希　もちろん。

川上　あら、やだ、でぶのくせにしたたかなのね。

真希　こうみえて、ガリガリですから、

川上　なるほど。でも、ほどほどにね。最後は駆け引きなんて意味ないのよ。土下座してでも大事なものを手にした人間の勝ち。

真希　はい。じゃ、そろそろ戻りますね。山下くん、帰ってくるかもしれませんし。

川上　気を付けてね。

真希　はい。あの、山下くんには、ここに来たことは……、

川上　黙っておいてあげるわ。

真希　ありがとうございます。

川上　こちらこそありがとう。

真希　え？

川上　次は3人で会えるといいわね。

真希　はい。

川上　楽しみにしてるわ。

真希　楽しみにしてます。じゃ。

真希、去る。

川上、穴を掘りはじめる。

第十二景

山下が穴を掘っている。
リサと川上が眺めている。

リサ　もう、明日なんですよね。
川上　もう、明日みたいね。
リサ　大丈夫なんですかね？
川上　大丈夫じゃないでしょうね。
リサ　なにやってるんですかね。
川上　なに考えてるのかしらね。
リサ　ヒコさん。
川上　はい？
リサ　ヒコさん。
川上　だれ、ヒコさんって。
リサ　だって、ヒコミさんって言いにくいじゃないですか。
川上　人の名前は、ちゃんと言いなさい、変に縮めたりしない。
リサ　でも、ヒコさんって、可愛いじゃないですか。ヒコにゃんみたいで。
川上　アタシ、ご当地キャラとかユルキャラとか、可愛いと思ったことないから。
リサ　ヒコさん、ってなんでヒコミってつけたんですか？
川上　なんで？
リサ　だって、気になるじゃないですか、変な名前だし。
川上　べつに変じゃないでしょ。
リサ　変ですよ、ヒコミ。

川上　べつに普通よ。普通につけたのよ。

リサ　普通って、お父さんがつけてくれたんですか？

川上　バカね、オカマの源氏名つけてくれる親がどこにいるっていうのよ。

リサ　違うんですか？

山下　本名だろ？

リサ　え？

川上　突然入ってきたわね、こっちの会話に。

山下　本名だよ。

リサ　どういうことですか？　ヒコさん、本名ヒコミなの？

川上　んなわけないでしょ。

山下　そいつの本名、マサヒコって言うんだ。

リサ　マサヒコ？

川上　マサヒコ。

リサ　マサヒコでヒコミ？

川上　だから、普通は本名に「子」とか「美」とかつけて、マサミとか、マサコとかを源氏名にするんだけど、私が入ったお店には、もういたのよ。マサミさんっておねえさんが。だからと言ってマサコやマサヨも紛らわしいしね。だから下のほうを取ってヒコミに決めたのよ。

リサ　全然普通じゃないですか。ヒミコも関係ないし。

川上　だから普通って言ったでしょ。

山下　なぁ。

リサ　ヒコさん、つまんないじゃないですか。

山下　なあ。

川上　なに？

山下　ちょっと変わってくれ。

山下、川上にスコップをさし出す。

川上　なんで、わたしが？

山下　ちょっとだけだから、ちょっと疲れた。

川上　なによそれ、なんで私がアンタの手伝いなんか、

言いながら、しぶしぶとスコップを受け取る川上。

山下　悪い！

リサ　で、結局代わっちゃうんですね。

川上　頼まれると断れないのよ、私って。

山下　悪いな。

川上　このお返しは高くつくわよ。

山下　すまん。

リサ　おじさん、ほんとに大丈夫なの？

山下　どうだろうな。

リサ　結婚式、明日なんでしょ？

山下　そうだな。

リサ　なのに、こんなとこでなにしてるの？

山下　なにしてるんだろうな。でも、なにやるかわかってるなら、とっくにやってるし、なにもないなら、こんなとこにはいない。なにかがあるから、ここでこんなことしてるんだ。

リサ　なにそれ？

山下　自分でもよくわかんないんだよ。

リサ　わかんないで掘ってるの？

山下　そうなるな。

リサ　なんかキモい。

山下　なんだそりゃ？

リサ　もしかして、いい歳して自分探し？　よくわかんないけど自転車で走りだしてた。みたいな、そういう感じ？　穴を掘ることは、自分の心を掘り出すことだ。とか言い出しちゃう？　それって相当キモいと思うよ。おじさん。

山下　そんなんじゃないさ、たぶん。っていうか、川上のときと、オレで、ずいぶん態度、違うくない？

リサ　だって、尊敬できない大人は尊重できない。

山下　俺よりオカマのほうが尊敬できるってこと？

リサ　だって、おじさん、なんか無責任なんだもん。婚約者、放っておいてこんなとこに来てるし。言うことあやふやだし。ヒコさんが言うことは筋が通ってるよ。ちょっとエキセントリックだけど。

川上　なによ、エキセントリックって。

山下　え？　もう終わり？

川上　それから、「ヒコさん」はやめて、男みたいでいやだから。

リサ　えー、だって、ほんとは男じゃないですか。

川上　男じゃないわよ、オカマ。

リサ　心の問題でしょ。

川上　心だけじゃないわよ。だって、わたしキンタマ取ってるもん。

リサ　え、キンタマ取ってるんですか？

川上　取ったのよ、見る？
リサ　それは、いいですけど。
川上　だから肉体的にも男じゃないの。
リサ　でも、キンタマ取ったぐらいで、男ってやめられるんですか？
川上　やめられない。やめられないのよ。キンタマ取ったぐらいじゃ何も変わらないの。
　よくバランス悪くなる。なんて言うけど、そんなこともなかったし。あ、でも、すね毛とか胸毛なんかは薄くなったかな？
リサ　胸毛生えてる女は嫌ですよね。
川上　でも毛なんて剃ればなんとかなるしね。
リサ　ですね。
川上　逆に男だったことを意識させられるわ。キンタマなくなると。
リサ　そうなんですか？
川上　後戻りできないんだな。とか、もう、男じゃないんだ。とかね。
リサ　でも、女になった歓びはあるんですよね？
川上　それも、どうかしらね。
リサ　ないの？
川上　むしろ、絶対、女にはなれないことに気づかされるかも。
リサ　じゃあ、全然いいことないじゃないですか。
川上　そんなことないわよ。わたしは取ってよかったと思ってるもの、キンタマ。
リサ　そうなんですか？
川上　自由になれたと思う。男をやめて女の子になりたい！　って思ってた自分を、縛りつけてたものがなくなったって感じ？
リサ　キンタマに縛られてたんですか？
川上　キンタマが縛りつけてたのよ、私を男に。

リサ　キンタマって、重いんですね。

川上　重いわよ。今でも感触とか残ってるもの。

リサ　キンタマの？

川上　そう、高いところにから下を見たときとか、キューンってキンタマ縮み上がるじゃない？

リサ　私に言われても、わかんないけど。

川上　あの感触が今でもあるのよ。今でも高いところに上がるとないはずのキンタマが縮み上がるの。

リサ　そうなんですか？

川上　そう。

リサ　ないはずの、

川上　キンタマが、

リサ　縮み上がる。

川上　すごいでしょ。

リサ　なんか、あれみたいですね。あの、マンガで見たことあるんですよ。あの、事故で失った手足が痛むみたいな

山下　幻肢痛だな。

川上　あ、また入ってきた。

リサ　ゲンシツウ？

山下　幻の手足の痛みって書くんだ。ないはずの足が痛む、失ったはずの腕の感覚が消えない。最近はアニメなんかの影響でファントムペインという言い方もするようになってきたかな。

山下、またスコップを川上にさし出す。

川上　またあたし？

山下　たのむ。（川上にスコップを渡す）

川上　さっきもやったじゃない。はい。（とリサに）

リサ　え？　なんでアタシ？

川上　少しぐらい、いいじゃない。新しい自分が発掘できるかもよ。

リサ　いりませんよ、そういうの。キモいです。

と言いつつ穴を掘るリサ

川上　で、その私のキンタマの感覚がその、何とかペインだってわけね。

山下　ファントムペイン。

川上　ないはずのキンタマが痛み、失った玉袋が縮みあがる。幻のキンタマの痛み。キンタマペイン。

山下　だからファントムペインだって。

川上　それって治す方法とかあるの？

山下　腕を失った場合とかだと、健康な腕を鏡に映して、その画像を失った腕と重ね合わせて作業をさせるらしい、そうやって脳の中の身体のマップを書き換えるんだそうだ。

川上　手足を失っても、脳の中では失う前の身体の地図がまだ残ってるってこと。

山下　そういうことだ。

川上　それじゃあ私もキンタマを鏡に映して、脳の中のキンタマの地図を。

山下　やめとけ、その姿を考えただけでぞっとしない。って言うか映すキンタマがないだろ、もう。

川上　あ、そうだ！　だったらどうすればいいのよ、私のキンタマペイン。

山下　ファントムペインだ。ずっと抱えとけばいいだろ。初恋の胸の痛みみたいなものだと思えば、苦にならないだろ。

川上　それってすごく男的よね。女の恋は上書きされるのよ。男みたいに昔の恋のことでうじうじしたりしないの。

山下　おまえはどっちなんだよ。

川上　どっちなんだろ？　でも、そうよねある意味、初めてふれた異性だったんだもんね。青春の思い出の一ページに……。

山下　なんか倒錯してるぞ。

リサ　あー、もう無理。疲れた。はい。（と山下にスコップ）

山下　うわっ、早っ！　ぜんぜん進んでないじゃん。

川上　どう？　なんか掘り起こせた？　新たな自分の一面とか？

リサ　そういうの、ぜんぜん無理ですから。自分探しとか、まったく興味ないし。

川上　じゃあ、何を探すのなら興味があるの？

リサ　え？

川上　なにか探してるんでしょ。毎日。毎日、服を泥で汚してきてるじゃない。なにを探してるの？

リサ　……。

川上　なにか大事なものかしら？　思い出の品？　何かの作品？　それとも、家族とか？

リサ　友だちです。

川上　友だち？

リサ　あの日、一緒に、ずっと一緒にいた友だち。

川上　友だちを探していたの？

リサ　（うなづく）

川上　見つからないの？

リサ　（うなづく）ずっとずっと探してるんですけど。

川上　見つからないんだ。

リサ　（うなづく）

川上　学校は？

リサ　（首を振る）

川上　避難所は？

リサ　（首を振る）

川上　そうだったの。

リサ　ヒコさんのキンタマと同じです。あの日、あの水の中でつなぎあった彼女の手の感触がずっと消えなくて……。そうじゃないか、徐々に二人の手が離れていくその感覚が忘れられなくて。

川上　一緒に水に飲み込まれたの？

リサ　（うなづく）

川上　それがあなたのキンタマペインなのね。

リサ　はい。

山下　ファントムペインな。

川上　それじゃあ、かならず探し出してあげなくちゃね。探し出して、もう一度、その手をつないであげないと、あなたもその腕に縛られたままになっちゃう。あなたも自由にならないと。

リサ　（うなづく）

川上　それで毎日、この丘の上から町を眺めてたのね。

リサ　（うなづく）どこか見つかると思って。

川上　友達の気配は感じた？

リサ　（首を振る）私だったら、わかるんじゃないか、彼女だったら呼んでくれるんじゃ

ないか、って思って探したけど。見つからなかった。

川上　大丈夫よ。きっと見つかるわ。二人の絆を信じるの。そういう勘はわりと当たるものよ。

山下　いいのかそんないい加減なこと言って。

川上　いい加減じゃないのよ。奇跡っていうのは、必ずあるの。でもいい？　それが出来なくたって、落ち込んだり、自分を責めたりしちゃダメ。リサちゃんみたいな思いを込めて、町を歩いている人は、何千、何万といるわ。ここにはたくさんの思いが渦巻いていて、あなたに送られた思いが届きにくくなってても、しょうがないのよ。

リサ　（首を振る）絶対見つけて見せる。

川上　ありがとう。

川上、リサの手をとり強く握る。

川上　私も手伝うわ。

リサ　？

川上　ここで、こんなかわいい子、見捨てちゃ、女がすたるってもんでしょ。

リサ　（黙ったまま、手を握り返す）

川上　山下、あんたも手伝うわよ。

山下　え？　おれも？

川上　どうせアンタもわけもわからずここにきて穴掘ってるだけなんでしょ。

山下　いや、それはまあ、そうだけど。

川上　アンタ、ここのこと覚えてないの？

山下　覚えてないわけじゃないさ、昔、自分が暮らした街だ。

川上　ここは？　この場所？

山下　何度か来た覚えはある。

川上　それだけ？

山下　あぁ

川上　だったら一緒に探しましょう。今のあんたにはここで掘っててもても、向こうで掘ってても、どこでもいっしょ。こんなとこにいるぐらいなら、リサちゃんのために探してあげましょう。

山下　でも、そんな勝手に……。

川上　いいから、動きなさい。あなたも、わけのわからない思いに縛られてないで、ここから離れてみなさいよ。彼女のために動いて、誰かのために動いて、自分のために動いて、そして真希ちゃんの元に戻ってあげなさい。

山下　いや、でも、おれは

川上　男ならグダグダ言うな！

山下　いや、あの、ごめん。

川上　あなたも自由になりなさい。

山下　え？

川上　あんまりわたしにがっかりさせないでよね。

山下　ごめん。

川上　行こう、リサちゃん。

リサ　いや、でも。

川上　今日は私の家に泊めてあげる。

リサ　いや、それは

川上　だいじょうぶよ。襲ったりなんかしないから。

リサ　そうじゃなくて。

川上　お風呂に入って、きれいにして、ゆっくり休んで、お友だち、探しに行ってあげま

しょう。

リサ　……はい。

川上　いいこね。女にしとくのがもったいないわ。

リサ　ありがとうございます。

川上　じゃ、また明日。

山下　あぁ

川上とリサが去る。

取り残された山下。

第十三景

山下、穴を掘っている。

田中がやってくる。

田中　山下さん、進んでますか？

山下　……。（無言でスコップを動かす）

田中　どうですか、調子は？　なにか見つかりました？

山下　……。

田中　外、桜、満開ですよ。

山下　……。

田中　春ですね。

山下　……。

田中　この間咲いたと思ったら、もう満開ですもんね。

山下　……。

田中　どうですか？　そこの、外の桜でお花見でも？

山下　……

田中　って、そういう気分じゃない。ですよね。

山下　すいません。

田中　結局、今日、行かなかったんですね。

山下　どっちに？

田中　どっちも。

山下　聞いてたんですか。

田中　真希さんのとこにも、川上さんのとこにも。結局、ここで穴を掘ってる。

山下　すいません。

田中　べつに謝んなくてもいいんですよ。私が傷ついてるわけじゃないですし。

山下　すいません。

田中　それにしても、ここに何があるんですかね？　なにが山下さんをここに縛りつけてるんでしょ？

山下　何ですかね。自分でもわかりませんよ。

田中　もしかして、ブスなんですか？

山下　は？

田中　山下さんのフィアンセ、ブスなんですか？

山下　なんで？

田中　ブスだから、結婚がいやになって逃げ出して、こんなとこでこんなことしてるんじゃないですか？

山下　ちょっと待ってください。

田中　もし、そうなら逃げ切ってください。最後まであきらめないで逃げ伸びてください。なんだったら、逃亡専門のいい業者を紹介してもいいですから。

山下　田中さん。

田中　負けないでください！

山下　そうじゃなくて。

田中　ファイト！

山下　田中さん。

田中　はい？

山下　田中さん、僕のフィアンセ、会ったことありますよね。

田中　え？

山下　真希。

田中　え？

山下　真希。会ったことありますよね。私を探す、この仕事のクライアント。

田中　え？

山下　ね？

田中　あ、あぁ！　会ってる。

山下　会ってますよね。

田中　会ってます。

山下　ブスでした？

田中　……ブスじゃなかった、と思います。

山下　何ですか、その間は。

田中　あれ？　何でですか？

山下　何でですかって。

田中　なにがあったんでしょう？

山下　それはこっちが聴きたいですよ。

田中　だったら、ブスじゃないじゃないですか。

山下　誰も初めからブスだなんて言ってません。

田中　じゃあ、いったいなんだったんですか？

山下　なんだったんでしょうね。

田中　なんでこんなとこで、なにしてるんですか。

山下　自分にもわかりませんよ。

田中　やっぱりあれですか、ほんとはこんなこと言いたくなかったけど。穴を掘ることは、自分を掘ることだみたいな、メタファーを使った、自分探しの旅ってやつですか。

山下　なんですかそれ、言ってて恥ずかしくないですか。

田中　恥ずかしいですよ。だから言いたくなかったけど、残るはこれしかないじゃないですか！　遅れてきた青春の流行り病。山下、自分探し２０１１！

山下　そんなんじゃないですよ。たぶん。僕に探せるような自分なんてないですから。

田中　だからこそ探したい！　ってこともあるんじゃないですか？

山下　そんなことないですよ。

田中　見つかりませんよ。

山下　え？

田中　見つかりませんよ。人探しのプロの私が言うんですから間違いありません。インドに行こうが、アンデスに行こうが、どこに旅にいったって変わりません。山に登っても、穴を掘っても、自分と向き合ってもわかりません。それで人間の本質は見えるかもしれませんけど、どんなに探したってそこに自分なんて見つかりません。

山下　自分なんて、ほんとはないってことですか？

田中　違いますよ。山下さんはここにいます。

山下　はい。

田中　ちがいます。ここにいるんです。私とあなたの間にです。

山下　え？

田中　自分が自分だけで完結してるなんて勘違いですよ。自分は自分に干渉する他者との関係性の間に生まれるものです。いつも強い人間、いつも弱い人間はいない。山下さんは今、私との関係性の中で今の自分を作っている。

山下　……。

田中　真希さんの前での自分はどうでした？　川上さんの前での自分はどうでしたか？　二人とも、今の山下さんを許してくれてるから、今、ここでこうしてる山下さんがあるんですよ。

山下　そんな風に言ったら、人はひどく受動的なものじゃないですか……。

田中　そんなことはありませんよ。二人を今のようにしているのは、逆に山下さんがそうさせてるんですから。

山下　なんだか煙に巻かれた気分です。

田中　なにが怖くて、二人の間の自分を更新できないんですか？

山下　え？

田中　なにが足りなくて、新しい自分を見つけられないんですか？

山下　なに？

田中　なにが引っ掛かって、その足を止めさせてるんですか。

山下　なにが……

田中　彼女に初めて告白して、友人の自分を恋人に更新したときのことを覚えていますか？

山下　えぇ。しどろもどろで関係ない話ばかりをしてました。

田中　そのとき、なにがあなたに勇気をくれたんですか。

山下　それは……。

田中　山下さん、ここに井戸があったこと覚えてますか？

山下　井戸？　こんなとこにですか？

田中　えぇ、井戸です。

山下　だってこんなところに井戸なんかあったって……　！

田中　覚えてますか？

山下　はい、かすかに、小さいころ、この丘に井戸があって、いつかその上に家が建って……。

田中　その井戸はたいそう古くからあった井戸でしてね、その井戸にはいろんな伝説が語られていました。

山下　伝説？

田中　古い井戸には、たいていいくつかの伝説があります。昼間の星が見える星見の井戸。自分の寿命がわかる姿見の井戸。未来が見える先見の井戸……。中には鯨が沿岸にくると潮を吹く鯨見の井戸なんてのもありました。

山下　この井戸は？

田中　星見の井戸ともう一つ、先見の井戸の伝説が語られていたようです。

山下　先見の井戸。

田中　そこにその井戸ごと買い取って家を建てた酔狂な学者さんがいた。それが私の恩師です。おそらくは単純な好奇心からだったと思いますが、その後がよくなかった。まさに酔狂、アル中で体を壊して、発作的にその古井戸に飛び込んだ。もちろん遺体は引き揚げられましたが、結果的に古い井戸は埋められてしまった。

山下　そうですか。

田中　びっくりしましたよ。あなたを探してたら、こんなとこにいるんですから。

山下　すいません。

田中　なんで謝るんですか。

山下　すいません。

田中　山下さん、あなたが探してたのは、ここの井戸のことなんじゃないですか？

山下　ここの、井戸？

山下、吸い寄せられるように穴を覗き込む

第十四景

穴を覗き込む山下

真希が現れる

真希　なにが見えるの、

山下　なに？

真希　なにが見えるの？

山下　なんだろう、あれは……星？

真希　星？

山下　あぁ、暗闇の奥底、光射さぬ水面に星が見える。いや、

真希　いや？

山下　あれは、

真希　あれは？

山下　君だ、君が見える。暗い星空の向こう、未来に呼び掛ける僕に応える君がいる。

君、君、君はそこでなにをしているんだい。

真希　だれに話しかけてるの、

山下　君だよ。

真希　わたしはここに居るよ。

山下　わかってるさ、だから君に話してるんだ。

真希　だれ、だれがそこに居るの。

山下　だれかが居る。たぶん君だ。今ここにはいない懐かしい君がこの奥で眠ってる。

真希　やめて、顔を上げて、
山下　なんていってるんだ。
真希　わたしの話を聞いて。
山下　おい、なんていってるんだ。
真希　聞いて、
山下　聞いてるさ、さぁ、
真希　わたしとその人どっちが好き。
山下　！、……どっちも。だって、どっちも君じゃないか？
真希　どっちか決めて、
山下　だって、忘れることができない。
真希　あなたは忘れる。
山下　嘘だ、
真希　今までずっと忘れてた。
山下　なにを、
真希　わたし、
山下　忘れてなんかいない、
真希　だったら、なんでわたしのことほうっておいてるのよ。
山下　放ってなんかいない
真希　ほってるじゃない。
山下　ほってない。
真希　うそつき
山下　……
真希　今あなたが向かい合ってるのは、昔の私？　未来の自分？
山下　……真希、

真希　思い出した。わたしあなたのことすきじゃないかも知れない。

山下　真希、

真希　でも待ってる、ずっと待ってるから。さようなら。

暗転

第十五景

山下が穴を掘っている。
傍らには川上。

川上　あんた、ほんとうにいいの？
山下　しょうがないさ。
川上　そりゃそうだけどさ。
山下　自業自得だよ。
川上　あたりまえよ。
山下　そのうち謝りにく。
川上　許してくれると思う？
山下　許してくれるまで、何度でも。
川上　あら、頼もしいわね。
山下　あきらめがついただけさ。
川上　なんに？
山下　自分に。
川上　馬鹿になったってこと？
山下　優柔不断なくせに以外と頑固だってこと。
川上　自分が何者かわかったみたいね。
山下　少しだけさ。
川上　すっきりしたじゃない。
山下　田中さんにさ、言われたんだ。
川上　なにを？

山下　あのとき勇気をくれたものはなんだった？　って

川上　あのとき？

山下　真希に告白したとき。

川上　なに？

山下　彼女の顔。

川上　なにそれ、おのろけ？

山下　結局、おれは自分じゃ決められないんだよ。

川上　なにその絶対的な優柔不断ぶりは

山下　だから、彼女に会いに行くことにした。

川上　ふーん、で、その勇気はどちらから？

山下　彼女を思い出した。

川上　なんだ、結局おのろけなの？

山下　いや、もしかしたら会ったのかもしれない。

川上　夢？　それとも妄想？

山下　嫌いって言われた。

川上　それは現実だわ。

山下　だから会いに行かないと。

川上　なんだか、妬けちゃうな。

山下　で、お前はどうすんだ？

川上　しばらくリサちゃんと一緒にいるわ。乗り掛かった船だもの。

山下　男だねえ。

川上　いまどきは女の方が度胸があるのよ。

山下　たしかに。

川上　田中さんも、手伝ってくれるって言うし。

山下　あの人なら、すぐ見つけ出してくれそうだな。

川上　いつまでも後悔と手をつないだままじゃね、かわいそうだもの。いつも元気でいろなんて言わないけどさ。悲しくたって笑っちゃだめなわけじゃないでしょ。要はメリハリよ。過去を見てくよくよするときと、未来を見て頑張るとき。両方あっていいじゃない。

山下　さすが、両方の性を生きてる人は違うね。

川上　アンタも、もすこし真希ちゃん、気遣いなさいよ。

山下　わかってるよ。

川上　そのくせ戻る気はないんでしょ。

山下　まあ。

川上　わけわかんないわ。それでよく真希ちゃんが許してくれるなんて思えるわね。

山下　いざとなったら、こっちに呼べばいいんだよ。俺が戻んなくても。

川上　なにそれ？　あんた馬鹿じゃないの？

山下　ま、そういうことも考えられるかなと。

川上　じゃあ、そのときは、こちらにおじゃまさせてもらいに来るわ。

山下　おじゃま虫は、ご遠慮ください。だけどな。

川上　傷つく言い方ね。

山下　冗談だよ。

川上　それじゃ、そろそろ行くわ。

山下　あぁ。

川上　そのうち、お店にも遊びに来てね。

山下　そのうちな。

川上　じゃ！

山下　じゃ！

川上、去る。

山下、再び穴を掘りはじめる。